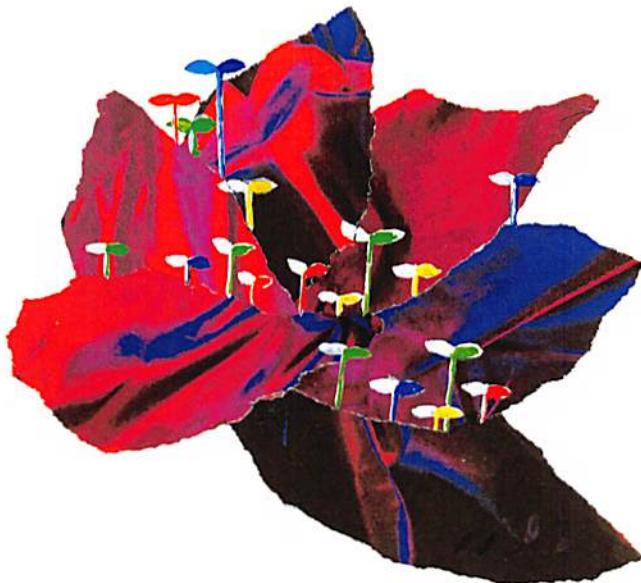


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 6



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを作化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二二年六月号 (通巻七六九号)

◇シルクロード・カフェ――【責任編集】木村文子

富岡明子 19

私と短歌との出会い (238)

木村文子 46

◇今月の二十首詠……宮島

高橋啓子 2

■遊覧香港 〈自然豊かな町に暮らして〉 鈴木文子 48

鈴木文子 48

■作品[A]

吉永惟昭・横田敏子他 4

山本 孟 49

A B A

横田美穂子他 20

西堤啓子 67

よしとみゆうこ他

山川弘美他 50

久我田鶴子 18

C

坂本禮子他 76

久我田鶴子 18

■オリーブ集

奥まさみ・上林節江他 62

久我田鶴子 18

◇今月の二人

辰巳洋子・村上康子 16

久我田鶴子 18

■色井静代歌集「風吹くままに」批評

34

オリーブ集……関根和美

久我田鶴子 18

「しきむもの」

笛木智恵美

久我田鶴子 18

それが私どうなずきながら

関根和美

久我田鶴子 18

◇夏のアンソロジー 〈西瓜の種〉

阿藤たつる 44

久我田鶴子 18

香川進の生きものの歌 44

田土成彦 14

久我田鶴子 18

クリップ……90

神田通信……表3

沖縄復帰五十年と「地中海」の五十年前

久我田鶴子 15

宮 島

高橋 啓子

一九六〇年生まれ

地中海入会時は青嵐グループ、
現在は昂グループに所属。

歌集に『地中海青嵐グループ合同歌集II』
「自己増殖」がある。

トンネルを抜けて見おろす瀬戸の海島のひとつに宮島がある

海上を行けば近いと思う島電車とフェリーを乗り継いで行く

岸を離れうなるようなエンジン音春の一日旅がはじまる

フェリーの三階デッキから見ているぼんやりかすむ対岸の春

宮島に到着の合図深緑の尖った山頂が近付いてくる

島の中歩くことは当たり前私を追い越す白いタクシー

宮島の町家通りをはや足に真先に訪ねる大聖院

願いごと何もない今摩尼車まわしながら摩尼殿に着く

足もとに祈る姿はさまざまに五百羅漢の石仏地蔵

赤黄の帽子の色はあたらしい石仏地蔵に春がきている

集う人感嘆の声聞いて咲く今日満開の宮島の桜

満開を愛でる人込み避けながらみつけたさくら木の下に立つ

坂道の鹿の糞に舞い落ちるうすいピンクの花びら一枚

五百年前に一望できたという海しげる木の間から見る

再建と修理を重ね嚴島神社沖合に建つ大鳥居

散水は歓待のサイン嚴島神社山側砂地を歩く

「そのごみは持つてかえって下さい」と五重塔下茶屋の主人

表札の文字あたらしい参道のにぎわいはずれた町家の一軒

コンビニもスーパーもない宮島の町家にひとり暮らす友人

一日の旅の見納めヤブツバキ長浜神社の脇に一輪

作品

A

吉永惟昭

ウクライナ

・熊

するすると収まらぬまま避難民一千万超ウクライナは冬
戦争なら侵攻一日で陥つキエフ ヨーロ アメリカ 世界も甘い
無難だからブーチンのみを非難する有識の士よ本ね啓けよ
統制のなき現在に自らを強制しているマスクミあわれ
コート黒 ポストン一つ 困境へ独りで来たと女難民
祖国捨つる思いはある日に返りゆく何も出来得ぬもどかしさのみ
祖国愛は死ぬことなりと見つけたりいみじ旨の葉わかる気もする

横田敏子

マスク

・福

入社式の新人社員の緊張を半分隠すか大きなマスク
リップクリームたっぷり塗りてマスクして急ぐスーパー値上げの前に
春の靴に入れ替えたる下駄箱をしばし聞けおく 春風入れん
「天罰をとれて下さい」人間の仮面を被るあの独裁者に
己の意に沿わねば 戦仕掛けると不条理通す独裁者ブーチン
独裁者を倒すクーデター起こすべし立ち上がりロシアの良心を示せ
世界中の怒りの渦の高まれど手を下せない歯ぎしりするのみ

養学登志子

ゲルニカ

・凌

ボンボンの赤い帽子の六地蔵そわかそわかと春の雪ふる
コロナ禍のいつか折合うものかとも また巡り来て春の花の芽
世の中は厄介もののウイルスに風邪の咳するこわごわとする
三回のワクチン接種終えた日は花屋の花がみんなほほえむ
春の雨葉先に光る水玉の雀の嘴に足りて飛びたつ
三本の指をかけるひと達よ握り拳を振るより強し
ゲルニカの前にどれほどいただらう忘れてならぬ怒声のきこえて

山下雅子

今年のさくら

・習

緩急の流れを生きこし九十二年誕辰の朝初き出するあり
孫やひ孫のぬくき余韻を纏いつつ車中に思わぬさくら愛でゆく
冷えしるき寒の戻りに震えるも染井吉野は泰然と咲く
咲きはじめを題歌すと見しさくらばなしとり見頃の花冷えの今日
すしり立つ桜ひとつもとはなやく景むかしの日本の春を醸せり
卯月生まれのわれのいのちのさくらばな花冷えの空に華やき綺う
はらはらりひかりとなりて舞うさくら今年のさくら地に通りゆく

山野幸司 反戦

・沖

ウクライナロシアの犠牲何のため平和の街に爆弾の雨
反戦の声は世界をかけめぐるロシア傾き兵引きさがれ
ウクライナ戦下に遺体麦畠穂は高々と黄金とならん
ニューヨーク五番街でも渋谷でもパリの屋根にも反戦旗搖れ
ノーワーのプラカード持ち街角に反戦集会友と声挙ぐ
われが手に握り締めたる青黄旗軍の視線熱く照らせり
ウクライナ侵攻ロシア戦前の日本軍国大本営よ

山本孟春 惣

・大

春近く雨降る街も竹簾も物憂さ充ちてしらずにしむ
春分の照りかげり道ひと聲の光のたまる雪柳ゆれる
パンの耳ミルクに浸しリンゴ搗る入れ歯の母の食べ方に似る
作り置き冷たくなつた副食を三度目温め食べる独り身
病院も逃げる市民も撃つ醫兵 ブーチン執務し冷たく命す
ウソ流す国営テレビに命懸け職員 "NO WAR" のボスター掲げる
町角に露兵の襲撃受ける子は七十七年前の宝田明

磯田ひさ子 蚕豆

・森

「すずなり」といふ蚕豆の鉢求むわが生日をみづから祝ひ
蚕豆の苗の具合を幼きはあしたゆべに確かめに来る
ふち色の花を泳がせ蚕豆の茎金剛の杖のこと伸ぶ
「心を止めにセメント詰めて置きました」こともなげに歯科医のたまふ
痛みさへ感じるはよし神経はあつた方が強くなるとふ
枯れたるも勢ふも共に均されてみどりひと色の芝生あらはる
手のひらを合はせ目を閉ぢ仏壇に何も思はず何も願はず

市原やよひ 菓の花

・萬

花桃は赤と白とに咲き分けて真宵き空のキャンバスの中
冷蔵庫の中に花咲く菜の花を花瓶に移す静かな雨の日
知らぬ間に黄に埋もれてた裏の畑春はいつでも唐突に来る
春来れば必ず芽吹くという道理我にも欲しき介護の日々に
又一人孫の旅立ち寂しさを笑顔に願す老い深まりて
孫三人急に成人になるという令和四年四月一日
為政者の一人の狂気が何もかも破壊してゆく人の命も

梅本武義 ブーチン

・羊

占い師バイデンという人が居て占い通りに悪魔が動く
対戦車ミサイル抱え墮城へ志願の市民の怒りの決意
声残り画像も残りヒトラーと同格なるを知るやブーチン
ブーチンに何を学ぶか見つめ居る習近平の今後が不安
ウクライナ思いブーチン憎みつつ眠るわれには平穏な明日
ウクライナ映像に怒り湧く日々は娛樂番組見る氣起こらず
埋められしビニール袋の白骨のDNAを調べる日の来ん

大浪美雪 春立日

・森

海近く葵老川は水際に春の光を打ちつつ流る
川の石ひとつひとつに龜のゐて甲羅干しをり時に目をあぐ
春立つ日庭烟起こそ鐵の先みみずを求め百舌の飛びくる
届きさうで届かぬ間合ひ保ちつつ百舌は鐵持つ夫を見張りぬ
尾を振らず声も立てずに鐵の先みみすよ出でよの百舌のひたすら
土中より出でたるみみず投げやるに素早く百舌は街へ飛びゆく
ぱつちりと黒き瞳に吾と堆肥塚百舌は交互に見据ゑ続ける

奥田陽子 さくら

さくら

羊

菊地栄子 間隔

間隔

湾

川のさくら咲き初めしとの声聞けば急かさる」と坂下りゆく
さくら木の一樹一樹に足留めてみあげゆくなり青衣のひとり
朝の雷夕べはひらくさくら花灯ともす頃を満ちて鎮まる
老いし女長く見るなく売られゆく庭の広きに一樹のさくら
鳥の水脈にとどかんばかり花の枝のふるえは止まず散りそめしなり
ただ一度花の下にて弁当をひろげし三人今日樹に寄れば
空青くふたりの娘らの笑みこぼれ耀うのみにありにしさくら

小野雅子 鶴鶴 羊

羊

枯芝の中にわづかに草萌えて小さき鶴鶴つつと歩む

みぞれ降る芝生を歩む鶴鶴の羽根の一部が白く輝く

鶴鶴も椋鳥も雛か五羽三羽、芝生を群れて歩み過ぎたり

春一番のつづきの風があを深き樹の下枝を梢を揺らす

ブーチン氏、長テーブルの端に座す恐れてゐるはコロナだといふ

オーストラリア産の葡萄が春浅きスーパー・マーケットで売られる

クリムゾン、トンプソンとぞ名のありて葡萄の色はみどりとむらさき

神田鈴子 廃墟の街 大

大

住宅も病院すらも爆破されウクライナの街いまは廃墟に

突然の戦に市民は逃げ惑ふ罪なき人ら幼き子らも

大き目にあふる涙こぼれ落ちウクライナの子が独り歩めり

争ひをやめぬ人間の性哀れ破壊されゆく美しき街

迫り来るいのちの極み見つめつたガン病む友の声の明るき

見事なる歌集を遺し友逝きぬ優しさと愛の満つる歌集を

その命消えゆく前に歌集をの願ひ叶へて友は逝きたり

門口に吹き入る雪の凍結を碎く鋼は空にひびけり

マンションの窓に夕陽が反射する眩しさ老いの眼を逸らす

真っ先に薬品店を開きたり シャッター閉じて幾年経たる

陽性者あらわれ保育所を休ませる一人っ子の孫守らんとして

ラーメンを食べる座席に間隔あり涙ぐましもこの食堂も

手を振ればカーテン裏に隠れゆくいつも留守居の隣家の猫

歯科医へ行かねばならぬわがトホホ暇なきは充実とひとり慰む

北山雪男 去りしひとり 伊

伊

去る者も日々鮮しく折々に偲ぶひとりの彼の日彼のとき

わが友〇、二十歳の春の出逢ひより春夏秋冬雪月花 酒

十年前嵯峨野めぐりの日のありきこれを限りの花見と知らず

酒好きで花また好きな彼の男、俺より先に逝く莫迦だとは

老桜あはれ別れの花となり吹雪きてやまず此岸の風に

京阪電車地下に埋められ春やよひ花のトンネル臉に疼く

あと幾たび見上ぐる花か涙腺のゆるみし視野にゆらりふくらみ

草刈十郎 無人駅 世

無精髪伸び放題に今はもつマスクの取れぬ顔となりたり

樹齢百年大樹は寺の歴史をば何から何まで知ること立てり

水仙花いけられ野の香放ちをり障子を染めて西日入る部屋

単線の無人駅より無人駅走る列車のリズム変わらじ

石切りの音のあたりに宿して山々深き眠りより覚む

かくまでに梅花に満ちし山里の村のあたりに人影のなし
世を喫き怒りを晴らす術もなく老いは一日ひとひ生ぐのみ

國井節子

世界地図

・春

近藤栄昭

・黙

・虹

世界地図久しく見たり大国が隣国を襲ふおぞましきかな

大国のロシアの横暴すさまじくルール無視して戦場と化す

この春の桜前線北上す武器など持たず北へ北へと

枯芝の日向ひなたに向き向きに四肢折りまとむ春の鹿たち

小さくともわが菜園の緑なす小かぶサラダ菜ねぎブロッコリー

ねばたまのタベ漁くなる水仙の香りは一人のわれを励ます

如何にせむ八十路の齡を下りをり漕ぐほどもなく自在に動く

河野繁子

・雁

散歩道に座して休めばしゅんびんに飛び交う三羽さえずり遊ぶ

小さき鳥海辺に住むかの名を持ちて咲の川辺に会うコチドリ

コチドリと出会わぬままにそれし道マユハケオモト咲かず軒下

初音きき耳をすませるひもながらロシア侵攻のニュース流るる

焼野原の国土逃るる難民の母子いすこへ手を伸ばしたき

折り合いをつけねば心收まらぬ桜を見ても小鳥を見ても

ふくろうの鳴き声聞きしと話す子の急に背丈の伸びしを仰ぐ

小林能子

・羊

・羊

コロナ禍は東北ユースオーケストラの公演うばひ三年目となる

十一年経て復興ならぬ東北にまたもや地震 新幹線止まる

奏では励まさると都山「お互いさまセンター」にはじける笑顔

コロナ禍を越え三年目の音合はせ 東北道征く東北ユースら

私の代はりに是非と賜りしチケットが届く 公演二日前

三年ぶり東京サントリーホールまで東北ユースの「第九」を聴きに

福島を忘れないといふこと浜通り避難地域にも春巡り来て

春の雨いたくな降りそ止まざれば心もしのに君を恋おしむ

「戦争は嫌い」とキエフの少女泣く ごめんね私なにもできない

ただ一人たった一人の男のため世界は黒く赤く塗られる

夢の中古い算符の抽き出しを探っているけど ない何がない

夢の中何かを探しているうちにみんなは先に行ってしまった

何ものか吾を呼ぶ声す彼方より君とも知れず母とも知れず

雨は止む桜の蕾ふくらみぬ面をあげて虹を眺める

坂上直美

・春風春兩人を愁殺す

・天

近藤芳仙

・信

里山の地肌はいまだ雪の白とく日差しにゆるぶことなし

あしたより外の面を横にぶぶく雪コロナ禍三度目の二月きてるる

夜をとほしゆりつむ雪かふたびの白き朝をもたらしてをり

冬靴の底がかみゆく雪の嵩 想ひつつゆく歩みおそかり

かけりやすき道につもりし雪ふまれ硬く光れりきのふもけふも

川水は音立ててをり 雪雲の晴れて凍てつく月夜のはたて

カーテンのむかうの間の月と星 永久なるもののしづけさにあり

坂 出 裕 子 つぐみ

・ 洛

コロナでも春は来るらし梅の花 日毎につぼみ白くふくらみ
ほのかなる香りただよふ白梅の開き初めたる庭のあたりに
今日もまたつぐみ来てをりひとり来てひとりついばむ小春日のなか
もうすぐ春が来るよとびよんと眺ひつと走りてつぐみついばむ
とほき日に楽しみ読みし物語こころふるはせ老いの日に読む
老いの日の楽しみに読む物語あしながらおじさん ビルマの堅琴
老いの日は誰にも来ると知りをれど己に来ると思はざりしが

篠 原 ま り 子

国境にて

・ 羊

オートミールは懐かしきもの妹は未だ居ない朝のベチカ
ロシアバン固き国境に生まれしは亡き父母と喫き同じく
晩年の父足繁く「ツンドラ」へ今は閉ざされしロシア料理店

冬永くロシアステープは具沢山穿いては転ぶスケートシユーズ
見開きの眠り足りない人の死はすべてにやさしき追影に向かう
災害は未だ忘れ得ぬ大地震に慘事の中の人をし想う
春の陽を見上げることなく頑なに何故にうつむくクリスマスローズ

柴 田 登 志 惠

無限軌道

・ 天

雪原に無限軌道の音低く眼る大地をゆるがし起こそす

こぼたれし家にころがるぬひぐるみ見廻れし戦ひのシーンではあるが
をさなごにこれはゲームと言ひ含め戦ひ逃れ来しと母親

戦ひにふるさと追はれ逃れしはほんど女と児ばかりなりぬ
はやばやとチエルノブリを攻めしより地球まるごと人質とせむ
雪に鳴る無限軌道をゾウガメは首伸べ聞きぬ赤道近く
さくらまだ畠固けれどくれなるのいのち吹き上ぐ枝の先まで

鈴 木 結 志 アマリリス

・ 福

花言葉「輝くばかり」アマリリス花美人とはかくなるものや
つややかに美し追憶アマリリスそっと唇寄せたき思い
紅映ゆるアマリリスの花咲きさかり寂の妙香灯中にひらく
作人の労をひむるやアマリリス見る目とりこに花こぞり咲く
点す灯を汲みて深紅のアマリリス独り占めには惜しく見つむる
精込めて君の育てしアマリリス一期の思い心にとどむ
甘き香をはなちてときになまめかし紅白紋りアマリリスの花

関 根 篤 子 小麦畠

・ 埼

道代えて今日の幸せ満開の桜に小さき杜と気づく
雨止みし後の公園水溜まる砂場に赤きスコップ浮きおり
友もまた帽子に眼鏡そのうえにマスクのままの会話は道端
続きいる侵攻のニュースに幼日のB29の編隊離る
戦いは今やミサイル攻撃に無惨な街のガレキの山は
ウクライナは世界の穀倉地帯とぞ小麦畠のはろばるしきに
断捨離ねいいえもはや終活と集積所に会う知人と笑う

関 根 和 美 文 字

・ 埼

小諸なる古城の園に咲きみちる共に見上げし終なるさくら

やまくらげ路にここみに胡桃そば前世はリスかも母は笑いぬ
ここに居る母 旅にある母 またそれと違う顔見す手帳のなかに
やわらかな文字にも母が匂いたちしばし触れるいとおしきもの
断捨離の対極を生きたいせつに保ち整え母は遊きたる
「お母さま幸せでしたね」「私こそ母と一緒に幸せでした」
口すさむ「また会う日まで」信仰のことなる母も天に聞くべし

高尾恭子

春は名のみ

・大

竹下妙子

命

・霧

信号の背を待たずに飛び出した脚にバネもつ春の少年

瀬戸内の潮風やさし「フウの木」は鳴呼ふみちゃんの追歌集なりき
正露丸十粒もらったルアンパンの旅のはほえみ汝のまなさし
岡山のお国訛りがじゅあ又と振りかえり振りかえる去年の歌会
朝ドラのように終わらぬ坂道をだらだらくだる落花をあびて
この先はゆるくるくだる迷い道 春の彼岸を詠でてひとり
〈春が来た春が来た〉とや朝刊に塾と家族葬の折り込み増えぬ

高津砂千子

悼伏見富美恵さん

・風

「もう一度食べたいなあの大きおにぎり」最後のメールに残る旅
仙崎の釣り人宿に泊りしがはじめての旅友とふたりの
おかみさんが持たせてくれしおにぎりは掌に包めぬほどの大きさ
待ちかねし歌集『フウの木』胸に抱き送きたるとう友弥生の半ば
チユーリップのようになにこやかな伏見さん十七年間変わることなく
コロナ禍で会うことならず友送きぬやさしき笑みの浮かびくるはや
チユーリップの花揺れている風なきに亡き友悼むや弥生尽日

滝田靖子

ぐらぐら

・新

踏みしめるはずの大地のぐらぐらと揺れてどうすることも出来ない
地震より緊急地震速報のアラーム音に心波立つ

去年より揺れが小さいやうなどぐらぐらしながら考へてゐる
散乱の部屋とりあへずそのままに朝の職場へ車走らす
奚落するフロントガラスに向かう側いつもと変はらぬ日常のあり
それぞれの被害を報告しあつてゐる患者の情報収集の間に
ウクライナのことを思へばこんなもの何でもないよと友の返信

田土成彦

斜面

・宙

一瞬のパンタグラフの青い火が冬涸れ原を照らして過ぎる
早春の土手の斜面に見つけたる土筆ひとつは摘まず帰り来る
春風に誘はれたどる堤道ところ構はず土筆萌え出づ
季のものと土筆の卵とちを食ふ土筆の味とはどれだつたのか
躊躇多く残して写真なき西郷の顔おぼろにとほし
フルベッキ写眞の西郷らしき人 長身 精悍 溫和にあらず
きしみつつ木戸を開ければ魔校の黒板に残る「さよなら」の文字

田土才恵

花冷え

・宙

消えゆきし命の焰花冷えの風に紛れて塵土に舞うや
うす寒き桜吹雪に紛れつゝ風となり行くひとつ御靈は
薄寒きよべの小さき地震ひとつ別れを惜しむ御靈の声か
義姉さんと親しく呼びし浪速の地みんなの世へゆきてしまえり
幼子は今大学生となりて立つ戸惑いながら眩しみながら
雨蛙色の電車は走り行く今はまばろし鉄橋の上に
ムスカリは去年の球根そのままで花咲かせおり空を指す背

玉井綾子 園庭

・羊

星前の路線バスから舗装路に園児の列のいくつも見ゆる
バス通り狭き歩道に園児らの手つなぎ列の途切れ離れて
保育士のばんばんのリュック十人の園児を連れて公園遠征
園庭のなき保育園 園児らの踏み場増すこと花びら散れる
園庭はなくとも四季は園児らと道路沿いの入り口から入る
平日の晴れの公園幼児らと大人が相次ぎ空を吸い込む
新宿の駅前広場に園児らの黄帽子の群れを見る十二階

虎谷信子

さくら

・伴

結婚の記念にとぞ庭植ゑせし しだれ桜木 満開となる
わが庭のしだれの桜 花つきよしと 道ゆく人まで 言ひ給ふかな
庭に出て しみらに桜見上げむか、先立ちし夫に 何の言葉
朝夕の桜の風情告げてみむ。ひとりごちるる ひとりのくらし
蔭庭にとどかむばかりの しだれかな。樹齢七十余年 殊更よかれ
散りそめし 桜花びら舞ひまひて、蔭庭彩り 日をかさねたり
とどきたる歌集の主の 計報知り 生命のはかなさ ああ愕然

中島央子

二ノ月

・森

感染者減らざる東京のがれ来て房総南端の春風に立つ
岬山の細山路のなだりには柳の厚ら葉光をかへす

北斎の富士さながらに東京湾へたつる二月の雪はかがやく
眼をこらし南へ転じし海坂のはるかに淡し大島・新島
晴れたるきさらぎ末の日あかねさすはらら「井に胃の腑よろこぶ

春の香のほろほろ苦し跡の森にげ足早き二ノ月の宵
風はまだ寒いと紋白蝶見えず菜花あかるき海岸ロード

中島義雄 感官

・岡

九十五歳の感官になほ名残ありてティトロッヒの脚は美し
汗したるシャツ脱ぎ捨てる快感を忘れバジャマの交換をする
冷えゆるむ廊踏みしめて取りに出る新聞活字の冷えを悲しむ
ホチキスの留金ひとつ瘦ひて探しぬままに春の廊道ふ
うつし身に何の矜持ぞ剃り残す鬚を探りて夜半剃りてゐる
土踏まずなりて久しき土踏まず今朝当つる風に春を思へや
見舞にと届きし花の名を知らずわなわなとせる手に抱くのみ

永塚節子

歳月

・銀

表札の変わらぬままに石屏は黒板屏へ歳月重し
くぐり戸を押せば広がる別世界ゆっくり飛び石踏みき
七分咲きの桜愛でつ城へ続く坂道登る三月の末
城と桜定番なれど外つ国の友へ送らんシャッターを切る
コロナ禍に会うは叶わずあの時の吉野の桜終となりたり
のほほんと桜愛でる人爆撃に逃げまどう人同じ地上に
のちのちまで幾代経つとも忘るまじハルビンの夏ウクライナの冬

仲西正子

九年母

・沖

枝ごとに胎動はしれる九年母に白き笛のふくらみており
おろおろと巢ごもりの春は三度きて九年母の花の白のすがしさ
すがやかに花咲き香る九年母よ過ぎき日のこと想いたたせり
雑草に紛れ咲き初む振花を探して移す庭の土へと
包圍され爆撃受けしウクライナの人ら逃れる「人道回廊」
冬空を「人道回廊」逃れゆく人らにあれなまた戻る道
立体なす学校・病院・劇場も爆撃されしウクライナ痛し

白子れい

白き世界

・浴

浜本美美

竹の秋

・夢

大雪の積みたる朝舞^{あさぶ}いきたる粉雪うけつお地蔵さまへ
そと差せる朝の光に溶けゆきて白き世界は夢の如しも
葉をもたぬ核古木の枝先に朝の滴の宿りてキララ
東の山に朝の光さし芝生の霜はキラリキラキラ
杖ふりて歩める吾にカアカアと呼びかけるも姿のあらず
雲ひとつなき碧き空群れとべる鳥を羨しむ独り身吾は
地蔵さま朝のおまいり夕方は安祥寺さまいつしか日課と

ばかりようこ

おむすび

・鹿

白蓮は早やもコートを脱ぎすてて白き肌えを空に跨れり
わが裡にも栖みたるらしき座敷わらしおりおりにふいと気配せさせたる
木造りの家古りたるがゆえよしか時にきしみて驚かせたり
待ち時間に倦みてためいきをつきたれば真向かいの人も大きなあくび
草^{くさ}に熱きおむすび渡されたぬくとき^{たまし}魂^{たま}をわたされるようには
憂きことも書きこともあれこの一生たっぷりと咀嚼してやるうじゃないの
敬いて魚の命をいただきぬ涙の味ほどの塩加減を添え

浜谷久子

新生

・地

生まれきて赤児は大きき口を開け新生の息をひたすらに吸う

如月の無事の誕生三姉妹草木にゆかりの名を付けられる

一通のメールに肩の荷を下ろす広がる風きの先に見る明日

ありえない申し出他県へ他県から毎週迎院送迎二往復

夫の手を借りるばかりの日常の来し方だったと省みて

パソコンを使えることも夫ゆえと目に見えているリタイアの時
なにげない言葉にこもるいたわりのひとしお染みる齡と思う

檜垣美保子

窓

・昴

金開の車窓に風を浴びている土手の夜桜遠くながめて
針葉樹ひかりのしずくを産む装置そうかもしだぬ雨のち暗れの日
七時間のちの未来がくることを前提にロールキャベツ煮ている
住む人は知らねどいつも西向きの窓九階に日の名残りあり
六階の空に双手を差し入れて闇引きおろさんとするときかけ
八重咲きの椿の花のひとつ落つひよどりの声もつれたるのち
重く垂れ八重の椿のさいまで花芯さらさぬままに土の上

福田庸子

冬の田

・今

冬耕起今年の米を作る意志山の裾まで広がりゆけり

冬の田に水張られて幾日経し守られゆかん今年の米は

冬の田に今年の作は約せる大谷川扇状地水生む大地

森の中を通りすぎゆく鉄道の音響く真夜さらに凍みくる

食糧危機間に迫りくる予感芽出し馬鈴薯の植ゑ場所探る

麦畑の隅に菜の花数本と背壁のボリープを簪ふドクター
幼児に戻りし母が我を呼ぶ部屋から部屋へ我を探して

藤田美智子 風花

・新

牧雄彦 ウグヒスカグラ

・大

ひとつぶの涙となれりひとひらの風花頬にたちまち落けて
夢のなか「迎へたのむ」と「父は言ふ待ちある場所は定かにあらず
天邪鬼といふはたやすしされど君に桜を厭ふ理由のあるべし
桜ばなを好まぬ君を遠ざける噂好きなるおしやべりの輪
桜には惹かれぬといふ君が駆く坂本冬美的『夜桜お七』
家の揺れをさまりてなほ揺れ止まぬからだを畠がおさへくれたり
白木連の花ひらきたり秘めゐたる思ひ一気に吐き出すことく

藤森巳行 今世の時間

・銀

うかららがリモートで集ふ三十三回忌義母の法要笑顔が浮かぶ
コロナ禍で二年も会へぬうかららが語り合ひたり義母の思ひ出
信号を待つての時間三十秒今世の時間がああ減つてゆく
あかぎれに杉の木のヤニ摺りこんで治したことをふと思ひ出す
山へ行き刀を作りチャンバラをした友今も一人残れり
『つゆじも』にあららぎの実の歌を見る赤い実食みし幼き日思ふ
お互ひにマスク帽子ですれ違ふ行き過ぎた後友と気付きぬ

船田清子 砂糖をこぼす音

・天

十余年前一房の葡萄も壳らざりしウイーグルの忠誠いかならむ 今
ウクライナの都市に轟く破裂音かの戦時下の恐怖背筋へ
P.M.5・黄砂・花粉と飛び来たり春の暖気が突如地上へ
雨上がり西日さやかに白球を輝かせつゝ天理同点
『墓防』の解除の日より選抜も鳴り物入りにて歎声が湧く
春雨は砂糖をこぼす音聞かせ桜の笛へささやきかくや
靴脱ぎの石の下より芽吹きたるみどりあざやかニワカタバミの

朝を畱みとほくに見ゆる大阪のビル街の影うつすらと見ゆ
朝露の上に浮かべるビル街に人はすでに働きをらむ
白じろと黄砂に添む日輪をめざしてゆくか渡り鳥の群
公園を老いが犬を連れてゆくわれは自分が影連れて歩めり
公園の敷石の道風が抜け会ひ得ぬ人の面影を追ふ
建設現場の人らの去りし赤土にクレーンの影が長く伸びたり
春浅き寺の裏庭夕づきてひつそりと咲くウグヒスカグラ

松浦禎子 お供

・羊

清々と明けたる空を見上げては石段のぼる道了尊まで
朱の下駄を履きて天狗の降り立ちし大雄山を目指してわれも
大雄山の山頂より届く一筋のひかりの座あり今年も伏して
股関節に金具のあれば急がすにいのちの一つ軽やかにゆく
みずから遅きあゆみもよろこびて道了尊に甘酒を酌む
一年の計ありのままにと帰りゆく木立のそよぎ胸に納めて
和美さんのお母様と一緒に天国へお供をしますひと夜をこめて

松瀬トヨ子 三線の日

・沖

湯気のたつムーチーの葉をはがす時蒸されて深し月桃の香り
三月四日万の島人のはじく唄三線の音色折りの音色
コロナ禍に困り通じ平和通り人影のなくただに深闇
ふっさりと咲く桃色イベー公園に蜜蜂の声おんおんひびく
米寿迎え軋む吾が膝亡き母の九十九歳の一世を偲ぶ
高々と三線の音風となり光となりて島の三月
一面のソーラーパネル体育館の屋根を覆いて光を集め

松永智子 蛍火

・風

宵ことの間を飛び交ふ螢二匹のびやかにしてうつくしとしも
臥す脇の小机にきて蒼白き螢火ひとつうごくともなし
ひとときを聞飛び交ひしそののちを厨のタオルにともる螢火
螢一匹飛び交ふ間の底に臥しあくことなく見上ぐる夜ふけ
音のなく間を自在に飛び交ひし二匹の螢かたみにともす
長かりしわの年月さりながら飛び交ふたつのあをき螢火
音のなきあかとき聞を飛び交ひし螢の一匹いづくにひそむや

三浦好博 再び鳴かず

・銚

耳遠き我に鶯とふ妻がしばし待てども再び鳴かず
授けたる生を喜びし勝手にて享たる子のそを訊きしとなし
栓開けて水飲む兎頭よし閉めて行くなら君は天才
我が歳と比べてしまふ寒風に立ちて旗振り行けといふ老い
浮氣なる夢虫はじつとしては居ず蒲公英の見る夢はいつとき
電柱に来て直ぐぼとり薙をする兎は虹門見せたるまことに
吠え返る空を音無く飛機が行く型崩れせぬ一筋の雲

宮本靖彦 服部緑地公園

・凌

京菓子のあと味のこと春雨にぬれ咲く桜園に拡がる
陣地跡高台おほひ桜咲く花木も友も吾も老いたり
一組の宴客もなき公園の花あざらかに満開を垂る
花滴開日曜の午後コロナ禍を人恐るるか公園開放
花滴開しづかに人ゆく公園よコロナと小雨に簾る日つづく
ウクライナに心は重くコロナ禍も七次のきざしに咲く花あはれ
ボランティアの古い友集ふ桜会今的孩子も折紙好かぬと

三好聖三 桜雨

・茨

冬の気をふたたび纏う一日を桜の雨は横向きに降る
猫たちに食べさせるため燕麦を刈ればようやく芽吹くじゃが芋
スーカまたプラトノイについて寝む寒さ戻れるこの二三日
擊つことは撃たれることにほかならず収容所長の腕に鳴る銃
先生と呼ぶのは止めてくれと言うある夜の会の橋川文三氏は
変人の性に似ているキャベツだと内葉裂きつつ妻殿が言う
母ココは海苔を好める猫である妻のかたえに座りつつ待つ

御代田澄江 ミモザ

・茨

もらひたる鉢植ミモザを地植せば黄に映え西の終南天と黄色を競ふ
霜枯れと氣落ちせし鉄線も萌え出でてこの世は春を迎へしものを
夢に来し夫の着をりし濃紺の着物は現に義母縫ひしもの
やがて行く吾も御許へ今は暫し子らの未来を賄らせ給へ
万両の赤き実ひとつ転び出で空はしぐれて雪雲走る
外出を控へしままに日は昏れぬ心とのへ明日に向かはむ
今は住まぬ友の旧居を見て過ぎぬ通院の途路バスの窓より

茂木斌 指揮詠題

・埼

夜祭りの当日の町もコロナ禍に屋台も中止に社も静かなり
食堂に疲れた足を休ませて先づはレモンサワーを頼む
夜祭りの屋台囃子もまぼろしに味噌豚丼の昼餉にひとり
指した手に思はぬ勝ちを得ることの指運と呼ぶ将棋の世界
何気なく詠んだ三十一文字の名歌となれば詠運ならん
ああ老いて頭の中は鶴井沢作歌ヒントも乏しこのころ
老人のアクセル・ブレーキ踏み違ひ事故記事けふも他人事ならず

もとむらしげと

面接練習

・そ

未熟なる者として我的前にいる子らはたびたび誤りを犯す

子らのなす誤りは過ちにあらず完了の「り」は「さみしい」に付く
助動詞を答えなずみてそんなもの知らなくてもという顔をする

発言は積極的でよしさはあれど評定三をつけねばならず
点数にこだわる勿れと教えつつ「テストに出るぞ」とつい口にする

解答欄埋めゆく子らにやわらかく冬の光は未来より射す
優しくて眞面目な子ほど言いよどむ面接練習は涙に終わる

佐藤道子 病院

・甲

見舞ふ人なく孤り寝る老女コロナといふはかくもさみしき

「お兄ちゃん時間教へてお姉ちゃん時間教へて」動けぬ老女が眞夜に叫ぶも
黄泉へゆく約束なりしか叫びゆし人は朝にびくりともせず

病院の高きより望む冬の街屋根つづきにて果てに輝る海

病棟の朝の静寂のさみしきに看護師さんのさへづり聞こゆ
「大丈夫?」大丈夫かと聞く子等に寝てゐるよりは増しと答へる

コトコトと朝の胡瓜をきざみ居り動けるとの幸せ思ふ

久我田鶴子 感熱紙

・羊

感熱紙に消えゆく言葉きえゆけよそこに貼りつく情念もろとも
職を辞しリハビリのはずの歳月にまはる歯車あとに引けざる

製ひくる声より守る耳ふたつ職を辞さむと思ひるし頃

難聴や頸関節症に悩みつ雁字摘め生きるのみに

ただ生きて棒のやうに立つてゐた思ひ返せば二十年前

くち閉ざし身を縮めるしどん底になほ手放さず短歌がありき
返球の遅れが招くぎくしゃくに見えくるものあり離れゆくあり

香川進の生きものの歌 44 田土 成彦

・ふっさりとゆさぶる翼が土に触る」のゆさぶりはわだつみ
を超ゆ
「木曽川」より

「木曽川」には鶴を詠んだ部所が二つあり、一つは長良川の
鶴飼の場面であり、もう一つは「黒」鶴の山の鶴を養殖してい
る土地での作品である。抽出歌は「鶴の山」での作である。

国内に生息する鶴には概ね「カワウ」と「ウミウ」があり國
内の鶴飼には性格的に比較的温和なウミウが使用されている。
この二種の見分けは難しくやや体形の大きい方がウミウで名前
の通りおむね海滨に棲む。しかしカワウも海岸べりに出てく
ることもあり、ウミウも河を遡上することがある。

歌の中には「鶴」という言葉は出てこないが前後の作から鶴
を詠んだものに間違いないと思う。全長八十四センチ（川鶴は
八十二センチとか）翼は小型で幅が広い、とあり「ふっさり」
のオノマトペが雄弁にその様を表している。野生の様な飼育状
態の様かは解らないが、野生の様ととらえたいと思う。結句は
作者の想像の詠嘆であるが、飛翔直前の翼の描写が「土に触る」
の具体的な視点によって一層現実感を醸成する。「鶴」という
日常の生活圏には余り出てこない鳥ではあるが国内で見かける
ことの出来る大型の水禽でその姿は驚ほど美しくはない。鶴飼
ではせっかく捕食したものも吐き出されて、けなげに恩直に
生きている姿がどことなく共感を呼ぶ。